

風車

紀州の歴史と文化の風

2009夏号

47

財団法人 和歌山県文化財センター

特集

「北山廃寺、北山三嶋遺跡の発掘調査」

連載

文化財建造物課 短信

きのくに歴史小話

「建築彫刻の話」

「発掘屋余話」

考古学の散歩道

「紀ノ川流域の古代寺院」

北山廃寺、北山三嶋遺跡の発掘調査

北山廃寺、北山三嶋遺跡は、紀の川市貴志川町北山に所在します。中山間総合整備事業（北山地区）のため、那賀振興局産業振興部農地課から委託を受け、和歌山県文化財センターが発掘調査を行いました。

過去の調査成果から、北山廃寺が、奈良時代前期（今から約一三〇〇年前）を中心とする古代の寺院跡であること、北山三嶋遺跡が、北山廃寺と一部重なっており、弥生時代から中世にかけての遺跡であることは知られていました。しかし、これまでの調査は、規模が小さかったこともあり、遺跡に関する大まかな情報しかわかっていませんでした。

今回の調査は、河岸段丘の縁に近い部分、北山廃寺からみれば外側にあたる範囲が対象となりました。調査の結果、弥生時代の集落跡をはじめ、古代の窯や粘土採掘坑、中世の瓦生産跡などが検出されました。

このことから、これまで、古代寺院跡という面から注目されてきた北山廃寺、北山三嶋遺跡が、集落、生産遺跡としても、歴史的に重要であるとわかりました。今回の調査で特筆すべき成果として、瓦造りの中心となる三つの要素全てを検

出したことがあげられます。具体的には、素材の採集場所（粘土採掘坑）、瓦の製作場所（轆轤の据え付け跡があり、工房とみられる建物）、瓦を焼く場所（瓦窯）の三つです。

時期は、古代寺院の近隣という環境からすれば少し意外なことですが、古代よりも新しい時代、中世でした。

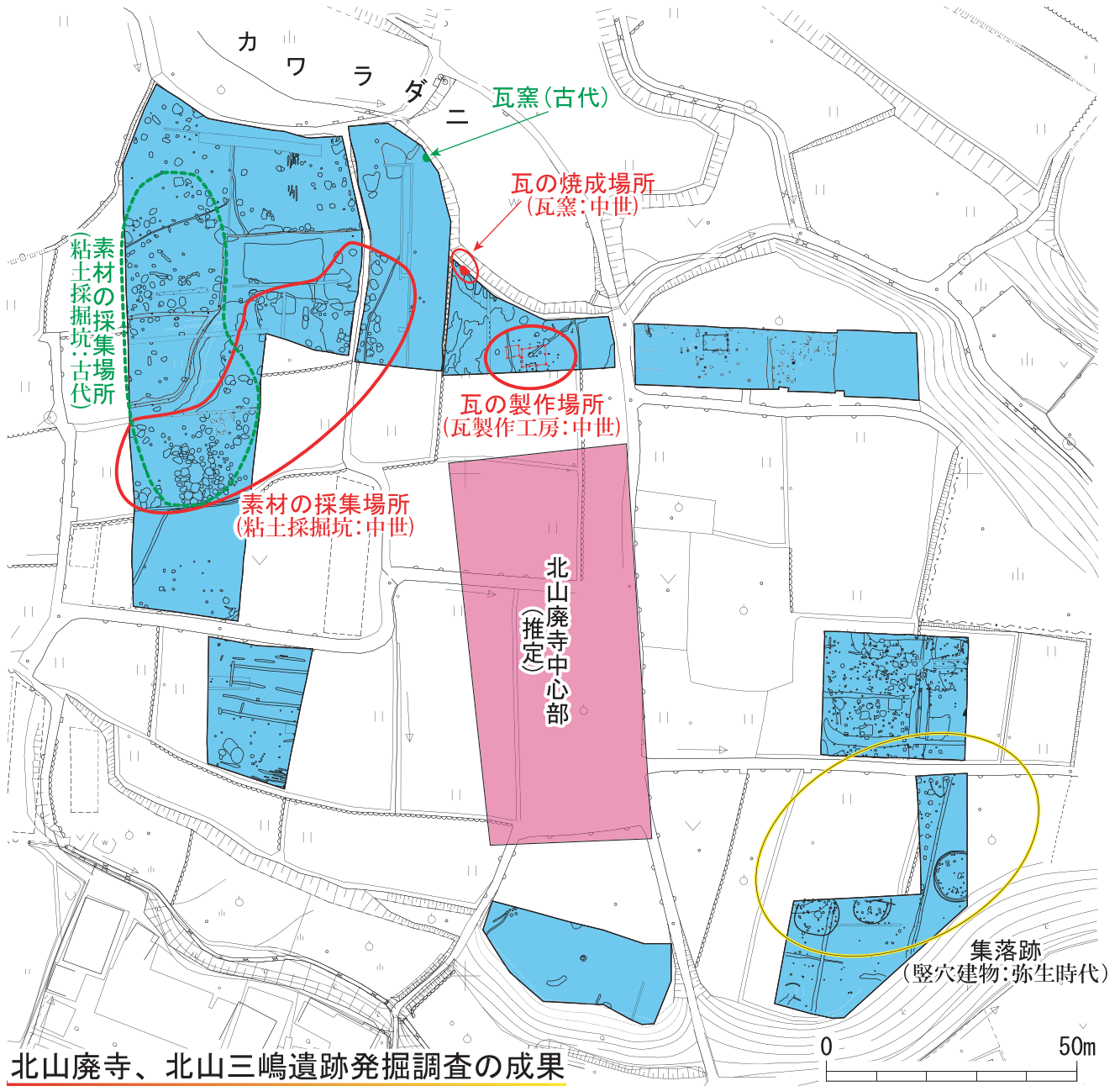
このように、瓦造りの主要な要素が全



素材を採集した跡（粘土採掘坑：中世）



瓦の製作場所（白線が柱の並び：中世）



瓦の焼成場所 (瓦窯: 中世)

瓦窯は、瓦を焼く部分（焼成部）を検出しました。焼成部は、長さ約二メートル、幅約一メートルで、写真の奥にあたる見つけた遺跡は、和歌山県では初めてで、全国的にみても、数少ない貴重な例です。さらに興味深いことに、瓦窯が面している谷は、地元では、「カワラダニ」と呼ばれており、今回の調査で、地名が瓦窯の存在を示していたことを裏付けることができました。



中世の瓦窯から出土した軒平瓦

る部分に、未発掘ですが、火を燃やす部分（燃焼部）があったと推定されます。

窯の内部からは、軒を飾る平瓦（軒平瓦）が出土しました。模様や作り方などから、一四世紀代（今から約七〇〇年前）に焼かれたと考えられます。今のところ、県内の遺跡などで、同じ模様を持つ瓦は見つかっていません。そのため、この地で焼かれた瓦の行き先は、謎となっています。

中世以外の時期では、弥生時代の集落跡を検出したことが目を引きます。北山三嶋遺跡で弥生土器が出土することは知られていましたが、集落があることは予想していませんでした。

見つかった四棟の竪穴建物のうち、三棟は、丸い平面形で、残り一棟は、半分が壊されていますが、四角い平面形で

す。弥生時代半ばから後半にかけての時期（今から約二〇〇〇年前）に建てられたと考えられます。

古代の成果にも触れないわけにはいきません。今回の調査は、寺院の外側にあたる部分だったとはいえ、全国でも四〇点程度しか例のない、塔の先端を飾るドーナツ形の部材（須恵質相輪片）が出土しました。さらに、工房こそ見つ

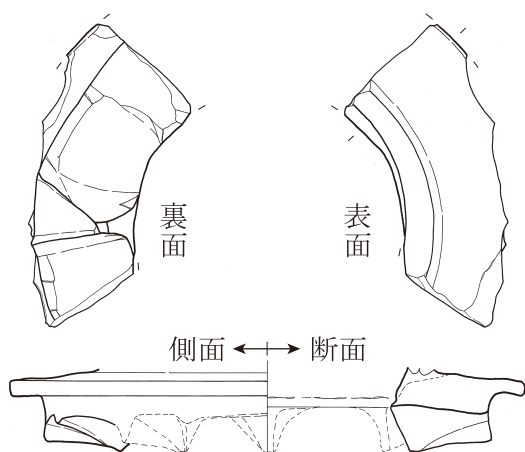


集落跡（▲印が竪穴建物：弥生時代）

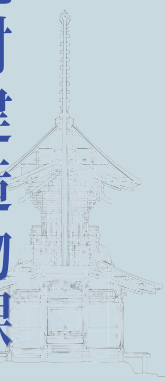
かっていませませんが、中世の時期と同じく、粘土採掘坑や瓦窯が見つかるなど、遺跡の歴史的な重要さを考えるに十分な結果を得ています。

今年度は、伽藍がらんの中心部（寺院の中枢部分）に、より近い位置についても調査する予定です。古代寺院に関係する遺構や遺物が大量に見つかることが予想されます。そして、まだ確定していない伽藍配置をはじめとする北山廃寺のさまざまな情報が明らかになることでしょう。

（岩井顕彦）



塔の先端飾り片（実物の4分の1）



金剛三昧院客殿及び台所

修理工事では現在、建物軸部の建て起こしや柱足元の修理、床組材の組立などを継続して行っています。また、建物の修理と並行して、貼付壁や襖などに描かれた障壁画の修理も行っています。そこで今回は、障壁画の修理工程を紹介します。

まずは修理前調査を基に修理方針を決めます。次に、解体による損傷を防ぐ為に仮の剥落止めを行い、本紙（障壁画が描かれる紙）をその裏の浮紙（下貼りの最上層の紙）ごと一体で解体します。解体後、再び剥落止めを行って、浮紙を除去し、ほこりや汚れを落とし、本格的な修理へと掛かります。

古い肌裏紙（本紙に直接貼られた紙）を



「肌上げ」の様子



「補填」の様子



「肌裏打ち」の様子

繊維をほぐす様に剥がしていく「肌上げ」、繕い箇所を除去を行います。この段階は、本紙裏面の調査などを行う絶好の機会でもあります。

次に、本紙の欠損が大きい箇所には「補填」といって裏面から補修紙を貼ります。それから「肌染め」をした肌裏紙で「肌裏打ち」「増し裏打ち」と貼り進め、最後に「裏貼り」をします。この後、補修紙上への「補彩」を施して完成です。

これら障壁画の修理は、国の選定保存技術保存団体に認定されている国宝修理装潢士連盟によって行われています。（下津 健太郎）



障壁画修理後（「補彩」前の状態）



障壁画修理前

紀ノ川流域の古代寺院 — 「日本霊異記」に描かれた古代寺院—

富加見 泰彦

前回、『日本霊異記』中巻第三十二話に記された紀伊の薬王寺（薬勝寺廃寺）の話をしました。今回は、この「日本霊異記」について話をします。

この説話集は正確には『日本現報善悪霊異記』或いは『日本国現報善悪霊異記』の名称で、平安時代初期に書かれた現存する日本最古の仏教説話集です。上巻 35 話、中巻 42 話、下巻 39 話の計 116 話が年代順に収められています。編集された年代ははっきりしませんが 9 世紀前半（弘仁 13 年 822）に書かれたともいわれています。

著者は、奈良右京の薬師寺の僧景戒で、紀伊国名草郡の出身といわれています。景戒については、下巻三十八に「妻子とともに俗世で暮らしていた」と記されており当時としてはかなり珍しい存在であったようです。説話の舞台は、東は上総（千葉）国、西は肥後（熊本）国までと広範囲に及びますが、畿内とその周辺部の記述が多く、中でも紀伊国の話が多くみられます。紀伊国出身といわれるゆえんでもありましょう。

仏教説話という性格上、善悪は、必ず報いをもたらし、それは現世に来るものもあれば来世で被ることも、地獄で被ることもあると説いています。説話の多くは善をなして良い報いを受けたという話か、悪をなして悪い報いを受けたとの話のいずれかです。善悪の応報を説いた因果譚であることがよくわかります。説話自体は、奇跡や怪異なものも多く、とうてい真実を伝えるものとは考えにくいのですが、当時の世相を反映しているものも多く、官主導の仏教とは異なる民間仏教草創期の様子を知る上でも重要で、後の『今昔物語集』などにも影響を与えたといわれています。

紀伊にまつわる話は全部で 11 話あります。そのうち寺名がわかっているものが 7 話あります。

上巻第三十四「紀伊の国安締の郡の私寺・・・」

中巻第十一「紀伊の国伊刀の郡桑原狭屋寺・・・」

中巻第三十二「紀伊の国名草の郡三上の村の人、薬王寺・・・」

下巻第十七「紗彌信行は、紀伊の国那賀の郡の里の人、・・・里に一つ道場あり。號けて彌氣の山室堂と日ふ。」

下巻第二十八「紀伊の国名草の郡貴志の里に一つの道場あり號けて貴志寺と日ふ。」

下巻第三十「・・・紀伊の国郡の人なり…先祖の造れる寺、名草の郡の能應の村にあり。名を弥勒寺と白ふ」

下巻第三十四「巨勢の皆女は紀伊の国名草の郡埴生の里の女なり・・・大谷堂に住し・・・」

考古学的に証明されたわけではないですが、恐れずに古代の寺院に当てはめると狭屋寺は佐野廃寺、薬王寺は薬勝寺、貴志寺は北山廃寺、弥勒寺は直川廃寺ということになるのでしょうか。読者の皆さんはどう思われますか。 (続く)



同右 「西王母」



三郷八幡神社の墓股彫刻「大黒様」

今回紹介するのは、海南市下津町にある三郷八幡神社の墓股彫刻です。ここには人物を題材としたものが二つあります。一つは俵の上に乗った人物で、肩には袋を担ぎ、頭には頭巾を被っています。「大黒様」に違いありません。その両脇には二股大根と、宝物の詰まった大きな巾着が置かれています。五穀豊穰と財福の神様です。

もう一つは、何かを持っているような格好をした人が木の下に立っています。ループスカートをはいた女性のように見えます。木には花が一輪と果実が三個実っています。桃のように見えます。これは「西王母」という女性の仙人に違いありません。西王母は三千年に一度だけ開花して実を結ぶ桃の実を漢の武帝に献上したと伝えられています。この桃は不老不死の妙薬なのです。

三郷八幡神社は周辺の三つの村の鎮守で、本殿は永禄二年（一五五八）にそれぞれの村の土工達が協力して建てたものです。この彫刻には五穀豊穰と長寿を祈った村人の願いが籠められている、そんな気がします。

（鳴海祥博）

女優、森光子さん演ずる「放浪記」が昭和三十六年の初演以来、二千回を記録したとのこと。国民栄誉賞の話もあり、ずいぶんと話題になっています。「放浪記」は、昭和初期を代表する女流作家、林芙美子の自伝的小説であり、彼女の出世作ともなった作品です。昭和六年、この印税をもとに彼女は、単身パリに出かけます。

その同じ年、ひとりの若く、貧しい考古学者が欧州の考古学を学ぶため、やはり単身パリに出かけました。森本六爾。明治三六年、現在の奈良県桜井市に生まれた六爾は、中学校を卒業後、地元の尋常小学校の代用教員として勤めるかたわら、県内の遺跡・遺物の研究に没頭します。

大正一三年、二二歳のとき、さらなる学問的情熱に衝き動かされるように六爾は上京します。東京では、赤貧のなかで雑誌「考古学」を創刊・編集し、自らもここに多くの論文を発表します。

六爾の研究は、青銅器から弥生土器、さらには古墳と多岐にわたりますが、中でも弥生稲作論―弥生時代には稲作が始まっていたことを明らかにしたことは、画期的なものであり、特筆すべき業績と言っているでしょう。それも大学教授や博物館の研究員でもない、在野の一介の若者として。

フランスでの滞在は、ともに一年にも満たない期間ですが、その間、二人が何度か会ったことが知られています。六爾も芙美子もこのとき二八歳。パリの空の下、六爾は考古学への思いを、わけても弥生稲作論を芙美子に熱く語ったのでしょうか。

（村田 弘）



催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報

(財)和歌山県文化財センター <http://www.wabunse.or.jp/>

○「地宝のひびき—和歌山県内文化財調査報告会—」

日 時：平成21年6月28日(日) 午前10時30分～午後4時50分

場 所：和歌山県立図書館(きのくに志学館)2F 講義研修室

記念講演：森 郁夫(帝塚山大学人文科学部)

「天武・持統政権と紀伊の古代寺院」

県立紀伊風土記の丘 <http://www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp/>

○春期企画展「古墳時代のくらしを調べよう」

期 間：平成21年4月14日(火)～6月28日(日)

和歌山県立博物館 <http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/>

○企画展「きのくに荘園の世界」

期 間：平成21年6月13日(土)～7月20日(月)

和歌山市立博物館 <http://www.wakayama-city-museum.com/>

○特別展「写真にみる戦後の和歌山 —復興と人々のくらし—」

期 間：平成21年7月18日(土)～9月6日(日)

御坊市歴史民俗資料館

○特別陳列「御坊人形のいろいろ」

期 間：平成21年7月20日(日)～8月31日(日)

現場事務所一覧

旧中筋家住宅保存修理事務所

和歌山市禰宜 148

TEL: 073(477)5969

金剛三昧院保存修理事務所

高野町高野山 425

TEL: 0736(56)5578

京奈和自動車道遺跡関連発掘調査事務所

重行遺跡発掘調査事務所

TEL: 0736(78)3740

県指定史跡水軒堤防発掘調査事務所

TEL: 090(3276)8475

埋蔵文化財課分室

和歌山市新在家 61 番地の 4

TEL: 073(472)3710

8	催し物案内
7	連載コラム 考古学の散歩道 「紀ノ川流域の古代寺院」
6	「発掘屋余話」
5	「建築彫刻の話」
5	きのくに歴史小話
2	文化財建造物課 短信
1	表紙 北山廃寺、北山三嶋遺跡
1	特集 北山廃寺、北山三嶋遺跡の発掘調査

風車 47 (2009夏号)

平成21年6月22日発行

(財)和歌山県文化財センター

〒640-8404

和歌山市湊571-1

TEL:073-433-3843

FAX:073-425-4595

E-mail: maizou-1@wabunse.or.jp

URL <http://www.wabunse.or.jp>